2.【青年海外協力隊の試験】

司会「これから協力隊をめざそうという方にとって、最初のハードルが試験になると思います。前回の座談会でも、過去問を一生懸命解いたという方がいらっしゃったのですが、皆さんは試験対策のようなことをされたのでしょうか。また、特別な技術を持ち合わせていない場合は、やはりどこかで身につけた方がよいのでしょうか。」

清水「古いほうからいいんですか？　新しいほうが？」

司会「この5年で、試験は変わっていますか？」

松舘「変わってますね。だって、齋藤先生なんか、一次技術試験免除ですもんね？」

齋藤「まったく別ルートですね。現職教員特別参加制度というのは、一次試験がなくて、二次が技術面接と人物面接です。まず、最初のスタートは、所属長である校長先生、教頭先生にお話を持っていくとこですね。そこで面接がありました。自分の志望動機や、帰国後、どう生かしたいかを説明して、そのあとに市の教育委員会、それから県の教育委員会と、合計3段階の面接を行いました。そのあと、最終的に県のほうで合格したら、次は文科省を通じて推薦され、そのままJICAのほうの選考試験になるんですね。面接では、自分の住んでいる神奈川県にブラジル人が多くて、教育の課題があるというこ

と、それらの課題の解決に向けて取り組むために、このボランティアに参加することが有効であるので、ぜひ行かしていただきたいと伝えました。送り出した側もメリットがある、帰国後にそうした特殊能力を身につけた人材が帰ってくるっていうメリットがあるので、ぜひお願いしますというアピールをしましたね。あとは、小学校教諭という職種で応募しましたが、やっぱり日本語の指導が中心になるってことは要請内容からわかっていたので、日本語教師の資格（日本語教育能力検定）を応募の1年前に取りました。

清水「町井さんは？　薬剤師って倍率そんなに高くないですよね？」

町井「薬剤師ですが、でも一度、薬剤師の職種として受験して落ちてるんです（笑）。」

清水「はっ？　あっすみません（笑）。」

町井「製薬会社で働いていたので、病院や薬局での実務経験がなかったんです。例えば、注射剤とかの扱いなどは実務としてやっていなかったので、難しいんです。でも、薬剤師としての知識も活かしたくて、そこから、違う方向性に変えるには葛藤がありましたが、結局は薬剤師としてではなく、感染症対策で受けました。それが、ニジェールの感染症対策でした。その職種は、自分の性格にも自分の持ってるバックグラウンド的にもすごい合っていたと思います。製薬会社だと薬があって、それをドクターと

かに説明して、処方を書いてもらう。協力隊だと、例えばマラリアとかエイズとかの啓発だと、病気の知識を持って、「こう予防してください」と啓発し、行動につなげてもらうというのがとても似ていました。だから、そういう点で試験に落ちて気が付きました。自分にとっての経験を活かせる職種を選ぶべきだと思います。また、協力隊の前に準備していたことは国際医療とか、あと英語は必要だろうと、英語を勉強していました。ほかは、いろんな人に話を聞きに行ってました。私が受験したときの人造語の試験はとてもおもしろかった。その対策とか、過去問は何回もかなりやりました。

松舘「おもしろかったですね。」

町井「おもしろかったです。あれ残念ですね、なくなって。なんか、こんなズラズラ書いてあって。例えば、英語だったら、This is a penとかって。This は「これ」、is は「です」、pen は「ペン」みたいなんで。なんとなくこう、いろいろガーッて書いてあって、それを分解して、自分で解読するみたいな。」

松舘「あの試験で、今まで英語とか勉強してないけど、語学のセンスのある人がわかるんじゃないかって思ったけどねぇ。」

清水「だって、現地語で仕事しなきゃいけないパターンって結構あるじゃないですか。

そんときのセンスがあるかどうかって、そういう試験で見てたのかもしれない。」

町井「たぶんそうだと思います。でも、その試験なくなったので、あとは専門のところですね。マラリアとかエイズなど感染症関連の試験の問題は、内容や数などは変化がなかったので、過去問を見て自分で勉強しました。一次試験が筆記で、二次試験がグループワークかあとは個人面接っていう感じでした。」

松舘「今は、グループワークないですね。」

町井「ないんですか？　結構おもしろかったですけどね。それでみんなどういうバックグラウンドがあって来ているとかわかるし。自分はこういうとこ足らないなっていうところがわかるので、おもしろかったです。」

松舘「私、協力隊の目的として、その相手国への貢献と、それから仲良くなってもらって、帰ってきたときに経験をまた日本社会とか世界社会に活かしてもらうっていう3つの目標があるので、そこをできる人かどうかが、鍵だと思います。今の町井さんみたいに、ちゃんと英語勉強してきたとか、ちゃんと学校で勉強してきたとか。」

清水「それ、就活とほとんど同じですね。」

町井「うんうんうん、一緒ですね。」

松舘「「行ったら、フランス語を勉強したいと思います」とか、「合格したら勉強したいと思います」とかではなくて、今やってますっていうのがちゃんと言える人がやっぱり受かるのかなって思います。」

町井「でも、そうじゃないと、現地で動けないですもん。それぐらいのパワーがないと。与えられるものだけで考えていたら。」

3.【青年海外協力隊の訓練】

司会「試験の次は訓練だと思うのですが、昔と大きく変わっていないでしょうか。」

清水「齋藤さんの場合、何日ぐらい、どこでやってました?」

齋藤「私は、みなとみらいのＪＩＣＡ横浜でした。期間は、2カ月ちょっとですね。4月に始まって、6月の上旬に終わりました。現職教員はそのあと2週間ぐらい技術補完研修、日本語教師としての訓練がありました。」

町井「日系社会青年ボランティアも、プログラム的には一緒ですか?」

齋藤「変わらないと思いますけどね。」

町井「なんで（青年海外協力隊の訓練と）分けてるんですか?」